

客員の會費

八拾錢  
拾參圓參拾八錢  
貳拾圓參拾貳錢  
支出 金四拾參圓九拾四錢五厘

内譯

參拾九圓九拾七錢  
參圓拾五錢五厘  
四拾五錢  
參拾七錢  
差引殘高 金四拾壹圓四拾壹錢五厘

會費領收

四十五年度分  
穗積 銀 富岡 きの 桑田 龍子 田北 よれ  
宮川 芳子 栗崎 トキ 井淵 英 清水 俊尾  
大村 都 村田 よしな 中村 芦子 三宅 よし  
芦川 春子 鷺尾 幾子 岩崎 まつしま 成瀬 よし  
大正二年度分  
栗崎 トキ 大村 都 三宅 よし  
外に客員安井哲子倉橋惣三兩先生より四十四年度分として金  
四拾錢宛領收せり

交詢

●母校たより

茗溪橋畔秋漸く更けて風瑟につもる落葉に哀を  
吟じ居り候。さても歎きの狹霧深き暮秋のあは  
れは北海のほとり南國のはても御同様の事と存  
候。例に母校の消息を些御報道申上ぐべく候

○大正元年九月十日第二學期始業式舉行せられ  
候。悄然として講堂に集りし私共は上壇の間の  
白木の杉戸に更に悲みの念を添へ申候候。式終  
りて長井長義先生より女子の心得に關する御話  
を蒙り申候。御話の要領は櫻蔭會會報第三十二

號にのせられあり候

○天日光暗き九月十三日午前八時十五分より  
明治天皇奉悼式を舉行致し候。憂愁の色森陰の  
氣滿堂を罩め一同肅然として 陛下の尊影を拜  
し奉る裡に、校長は奉悼の辭を讀み給ひて「熱  
涙滂沱五内裂くるが如く殆ど情を成し難きを如  
何せん」と聲をこめたまふや式場遽に嗚咽の  
聲起る。奉悼の歌を唱へ奉るにも胸塞がりて聲  
は振へがらにて候ひき。式終りて吉田先生より  
陛下御盛徳の一端を拜承いたし候。これも櫻蔭  
會報第三十二號にかゝげられしものに候。

○星疎に弦月影淡き十三日の夜二重橋畔に謹み  
て御大喪儀を奉送いたし候。嗚呼大内山の松風  
の音、篝火の色、御發軔合圖の號砲、諸寺の鐘  
の音、御輻車の軋り「哀の極」の悲韻など深く  
胸底に刻まれし悲の印象は、いつの世にか  
消ゆることの候ふべき。斷腸の語もこの悲をあ  
らはすにはあまりに平凡に候。

○十一月六日は畏くも 明治天皇陛下の百日祭  
に當り候へば、午後一時より講堂に參集西にむ

かひて遙拜いたし候。終りて校長より限りなき  
御坤徳を頌し給へる御話承り候へば更に深き哀  
痛の情新に涙と共に湧きいで申候。  
○今年の秋の郊遊會はひかへ申候。然し文科二  
年の鎌倉史蹟しらべ、同二年二部の箱根研究、  
文科並に技藝科三年の日光旅行は見學の爲め止  
むを得ず夫々目的を達し申候。姉君達の御思ひ  
出や如何に。

○十一月九日本校職員生徒一同は滿腔の熱誠と  
喜悅とを以て、奈良女子高等師範學校の旅行團  
を歓迎いたし候。御慰にもと豫て企圖せし本校  
獨特の餘興はこの折柄畫餅に歸し候ひしも、電  
燈の光炫き大講堂に相會し、兩校長をはじめ兩  
校生徒總代の親善懇篤なる挨拶を換されし時は  
さすがに姉校よ妹校よと互に握手したる心地い  
たし、不思議なるばかり懐かしき情湧き出で申  
候。食堂の入口には Well come の金文字八つ手  
の縁に映えてうつくしく、會食中の談笑はポリ  
ホンの妙音に一しは興を添へ申候。夜は再び講  
堂に知己相集りて盡させぬ物語に舊情を温め、

惜しき團樂を解きしは九時過ぎにて候ひき。  
 ○二階堂先生は体操研究の爲英國に留學を命ぜられ給ひ、愈十一月二十日には御出發遊さるる事に相成候。御體質至極健全に御熱誠燃ゆるばかりにいらせ給ふ先生が世界の先進國に研修せられ、益々我國の女子體育の爲に御盡瘁下さるべき前途を想へば、お互に如何なる言葉をもてか御祝ひ申上げ奉らむ。只管先生の光榮を負うて御歸朝あらせられむ日を待ち奉る次第に候。  
 ○嗚呼明治の御代は既に過去てふ幽暗の裡に葬られ申候。大正の改元により新しき自覺と實行とに生くべきことを促されたる國民は更に再び乃木大將の偉大なる人格の力に感應いたし候。今日私どもも新時代の學生として深厚なる靜肅と嚴格なる眞面目とを以て、健全なる發達の途を辿らむことを努め居り候。終に臨み會員皆様の益々御健全に渡らせられむ事を祈上候。

◎日本海の唯中より

「大君の勅かしこみ來いといふたごてゆかりよ

候。僅か周圍五十三里面積五十六方里の小國には候へども、名所舊蹟少からず候。御出でもなきて、配流の土鬼も住むらむなど御考へあるは、佐渡のために惜しむ所にて候と、やさしき佐渡人に代りて氣焰を吐き冤を雪がんといたし候。眞野御陵。「陵は佐渡の守ぞ千代の春誰の句に候やら。實に佐渡は御陵ありての佐渡ぞ存じ候。さるに誠に口惜しく存じ候は、物知れる人は格別さらぬ一般の人々は、根本寺羽黒山などへわざと參る事はいたし候へども、御陵へとわざと參る人は少なきことに候。各小學校にては十分此處に意を用ひて修學旅行などには參拜いたすやうに力め居るやうにて候。  
 御陵は眞野村眞野山の麓にあり。方五十間の石垣をめぐらして御陵の外郭といたし、其中央に方八間の石垣之れあり候て、内に柵門を設けあり候。この兩端にある二臺の石燈籠は延寶八年奉行會根五郎兵衛の建てしもの、由に候。承久帝遷幸三年の後廿二年仁治三年九月、御還幸御絶望の餘御惱に罹らせ給ひ、御存命無益の

かといふ佐渡へ行く君」とは、明治十一年に先帝陛下北越御巡幸の砌富小路侍従を佐渡に遣はされて眞野御陵に御代拜せしめ給ひしとき、岸田吟香氏の送りて詠まれしなりとか。實に來いといふとてゆかりよかぞ申したりしは昔の四十九里とは能登國よりこのこと、越佐の連絡は新潟夷間三十二哩、寺泊赤泊間二十二哩、直江津澤根間にも四十二哩しかこれなく候。來いといふ人あれ島は涼み時」といふ句のあるは當然のことに候。越後直江津の鹽たれ歌に「佐渡へ佐渡へと草木がなびく佐渡はよいかい住みよいか」と申すものあるよし。私はこれに「佐渡へ佐渡へと草木もなびく。佐渡はよいとこ住みよいとこ」と返し度く候。これ住めば都とて自惚て申すにてはなく候。佐渡人も鬼住む里の如く思へる他國人に紹介したしとしまきりに工夫をこらし、觀光團等を優待いたし居り候。私も佐渡人となりし上は何誰様にても御出で下され候やうおすゝめ申し上げ候。その節は喜びてお迎へいたし御案内の御便宜などもはかるべく

由被仰、御絶食崩御を御祈請あらせられ、遂に同月十二日崩御あらせられしよしに候。承久の御代の御事歴史に學びて何かと考へ居り候もの、まのあたりに拜し奉り候ては今更ながらに涙の下るを覺えず候。御遺骸は此の地にて御火葬にし奉り、御灰を納め、御遺骨は京都大原の法華堂に納め奉られ候ひしは皆御承知の御事と存じ候へども、筆の勢こゝに及び候。其の後山陵いたく荒廢いたし候ひしを、延寶七年佐渡奉行會根氏(吉正)國分寺の住僧賢教の建言を容れて修造を加へ、又王政維新の後外郭の石垣を修理いたして今日に及びたるものに候。又明治七年朝廷に於かせられては、宸靈招迎の御式を擧げさせられしよしに候。  
 御所趾は御陵より東南一里余の山中にあり候。今なほ御陵のあたりだにうらさびしきに、これより山中一里とは如何ならむ、殊に昔時に於てはと只々畏ふ存じ候。  
 金北山「神のます越のね高くなびくなりとはにかゝれる雲の白ゆふ」佐渡第一の高山を金北